



子規と神戸病院

寺島, 俊雄

(Citation)

神戸 街角の解剖学:71-77

(Issue Date)

2016-06-15

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482787>



青空文庫に公開されている正岡子規の随筆「病」をガラ携で読んでいたら、結核を病んだ子規が「神戸の病院」に入院する記述があった。神戸の病院とは県立神戸病院のことで、現在の神戸大学医学部附属病院である。この子規の随筆には弟子の高浜虚子と河東碧梧桐かわひがしへきごとうが神戸病院に入院中の子規を見舞い、手厚く看病している記述があった。そこで虚子の随筆「子規居士と余」を青空文庫で読んだら、やはり神戸の病院が出てくる。司馬遼太郎の「坂の上の雲」や伊集院静の「ノボさん 小説 正岡子規と夏目漱石」を買って読んだら、やはり神戸の病院が出てくる。他にも子規が県立神戸病院に入院した事実を示す本は多数あるが、子規の「病」と虚子の「子規居士と余」の二作品が最も面白いのではないだろうか。その理由は、何と云っても子規とその介護者の虚子自身の筆によるものだし、二人は俳人だから文章が簡潔で無駄が無い。通勤中、私はこの二つの随筆をガラ携の小さな画面で繰り返して読んだ。

明治28年4月10日、日本新聞の記者であった子規は日清戦争の従軍記者として広島市の宇品港うしなから海城丸に乗り込み、中国の遼東半島に向かう(図1)。当時の戦況は日本側の勝利が明らかで、講和条約の締結に向けて秘密裡に交渉が進んでいた。4月15日、子規は大連湾の柳樹屯りゅうじゅとんに上陸し、金州城きんしゅうじょうに入る。その2日後の4月17日に講和条約が締結される。だから子規は中国大陸でほとんど戦争らしい体験をしていない。近衛師団の軍医部長として金



図1 新聞「日本」の従軍記者の正岡子規。(明治28年3月30日 広島にて撮影。大刀は久松家から拝領したもの。)

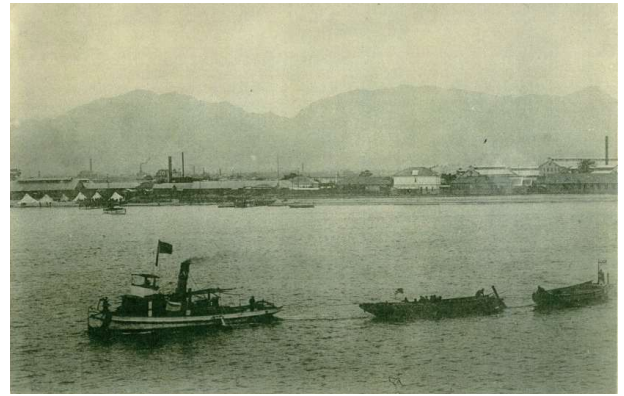


図2 和田岬検疫所(出典:文献4)

州城にいた森鷗外と文学談義をしているほどである。従軍記者として華々しく活躍することもなく、5月14日子規は大連港で佐渡国丸に乗船し、馬関(下関)へ向け帰国の途に就く。子規の「病」はこの佐渡国丸船中の記述から始まる。

5月17日、船に沿って飛び跳ねるように泳いでいる大きな鱸ふかを見るために佐渡国丸の甲板上がった子規は嗜血する。子規にとって4度目の嗜血である¹⁾。18日、馬関に着き、19日、彦島検疫所で下船して消毒を受ける。ところが折り悪しく20日に船内にコレラ患者がでたため乗客は本土上陸を許されず、翌21日に佐渡国丸は兵庫の和田岬の検疫所(図2)に向かう²⁾。そして22日の午後には和田岬に着くものの乗客はさらに船中で1日足止めされ、翌23日の午前には下船を許される。検疫所で検疫を受けて、午後3時頃に子規は従軍の一切の義務から解放される。子規の「病」によれば、和田岬の検疫所を出た子規は、歩くことは無論、人力車に乗る体力すら残っていない。そこで同行の記者仲間に神戸病院入院の手続きと釣台(以下担架とする)を頼み、担架に載せられて神戸病院に向かう。担架は油單ゆだん(油紙)で覆われているため子規は外を見ることができないが、やがて人の往来や太鼓の音で「土地の祭礼」中を通っていることがわかる。子規を載せた担架は灯ともしごろに神戸病院に着き、子規はそのまま二階の二等室に入院する。

この子規の随筆「病」の読後感の印象が鮮明なころ、私は神戸大学附属図書館医学分館の二階に「中浜東一郎日記」という五巻の本があるのに気付いた³⁾。中浜東一郎(図3)は、ジョン万次郎(中浜万次郎)の長男で、明治14年に東大医学部を卒業する。同級生には森鷗外がいる。卒



図3 中浜東一郎 (出典：文献3)

業後、岡山や金沢の県立医学校の教諭を経て、明治18年にドイツに留学して衛生学を学ぶ。明治22年に帰国後は内務省衛生局に勤務してコレラなどの防疫や衛生行政の第一線で活躍した。膨大な日記を読むともなくページをめくっていたら驚いた。明治28年5月23日、中浜東一郎が和田岬検疫所で佐渡国丸の消毒を指揮しているのである。さらにその前後のページを読むと、東一郎が神戸に出張を命じられるのが5月20日、そして翌21日の午後9時55分の東京駅発の夜行列車に乗り、22日の午後には神戸に着く。その翌日の23日に和田岬に赴き、佐渡国丸に乗り込み、船底の汚水の消毒法について担当者と相談する。この東一郎の日記は子規の陣中日記の記載とピタリと符合する^{2a)}。さしたることはないが、私にとっては生まれて初めての文学史上の発見だ。

こんな偶然もあり、いつしか和田岬検疫所から神戸病院の跡地まで歩いてみようという気になった。明治33年に楠町7丁目に移転する県立神戸病院は、当時は下山手通八丁目で西本願寺別院(通称モダン寺)の近くにあった。一方、スタート地点の和田岬検疫所はどこにあったのだろうか。子規が和田岬に来る10年後のものであるが、陸軍省による明治37・38年戦役検疫誌の附図が近代デジタルライブラリー⁴⁾に公開されていたので、ダウンロードして調べた所、和田岬検疫所は和田岬砲台と灯台の西側に隣

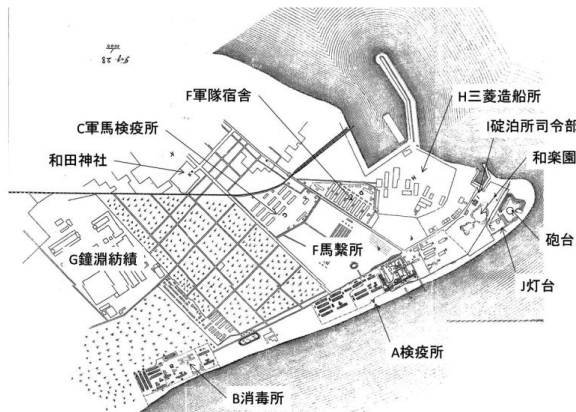


図4 和田岬検疫所 (出典：文献4)

接していたことがわかった(図4)。そして検疫所の西隣り、つまり遠矢浜辺りに検疫所に付設された消毒所がある。現在の地図で調べると和田岬砲台は三菱重工造船所の敷地内にあるのが確認できたので、とりあえず造船所に行けば検疫所の跡地が確認できるのではと考えた。明治37・38年戦役検疫誌の地図には砲台の西隣に和田岬灯台が記入されているので、灯台も検疫所の位置を探る上でラウンドマークになるはずであるが、和田岬灯台は昭和38年に廃灯され、須磨海浜公園に移設された。図5は明治23年に開業した私設遊園地の和楽園のイラストであるが、当時の和田岬の状況がよく分かる⁵⁾。中央に洋風3階建て高樓「眺望閣」を据え、魚釣場、ビリヤード場、子供の遊び場、茶店や休憩所などを配した一大レジャーランドで、明治28年には水族館も併設された。アクセスは悪いが随分と繁盛したらしい。図5を良く見ると、和楽園の眺望閣の左後方に砲台、右後方に灯台が見える。この図には描かれていないが、灯台の右方つまり和田岬の西の海岸が遠矢浜で、そこに検疫所と消毒所があったはずである。

平成25年10月10日(日)の午後、私は三宮から市営地下鉄海岸線に乗り和田岬駅で下車して、広い幹線道路沿いにJR和田岬線の和田岬駅に向かった。駅前の交差点で和田宮通りを南に歩くと、ほどなく三菱神戸病院のすぐ前にある三菱重工造船所の入り口に着く。門衛の方に敷地内の砲台や検疫所跡を見学したいとお願いしたところ、言下に断われた時はさすがにがっかりした。以前、神戸港の周遊船に乗り造船所のドックに係留されている潜水艦を見たことがあるが、造船所敷地内の立ち入り禁止は防衛上の機密もあるのだろう。子規ゆかりの神戸の地を尋ねる試みは最初から頓挫してしまった。

虚しく家に帰り、ネットで和田岬検疫所について調べたところ、明治11年に開設された和田岬消毒所は明治29年に和田岬検疫所と名称を変更する。この和田岬検疫所は昭和21年3月に厚生省直轄の神戸検疫所となる。そして昭和38年9月に兵庫区遠矢浜町^{とおやはま}に移転する。三菱重工造船所内の和田岬検疫所の跡地の探訪はあきらめ、遠矢浜の神戸検疫所をスタート地点の代替地とし、ここから県立神



図5 和田岬和楽園中央の眺望閣の左奥に和田岬砲台(矢印1)、右に灯台(矢印2)がある。灯台の右方の海岸は遠矢浜。(文献5)

戸病院の跡地に向かうことにした。

和田岬から神戸病院に至る経路はわからないが一つだけヒントがある。「病」にあるように子規を載せた担架が土地の祭礼の中を通過することである。この土地の祭礼とは検疫所の近くの和田神社わたみやに関係あるのではないだろうか。明治5～7年の和田神社のイラストを見ると、その背後に砲台や灯台が描かれている(図6)⁶⁾。そこで和田神社のホームページで神社の行事日程を調べると5月22日に古儀祭という祭礼が行われることがわかった。子規が和田岬から神戸病院に向かうのは5月23日だから和田神社の祭礼は1日ほど違う。しかしさらに調べると明治44年以前は和田神社の祭礼は5月23日であることがわかった⁷⁾。以上より子規を載せた担架は和田岬検疫所から和田神社の前を通過し、県立神戸病院に向かったと推測した。もっとも和田神社は、明治34年造船所の建設のために和田岬から現在地の兵庫区和田宮通3丁目に移転するから、子規の通った道を正確に辿ることはとてもできない。ともかく遠矢浜の神戸検疫所をスタートし、三菱重工造船所の入り口から和田神社前に出て、後は幹線道路沿いに神戸駅方面に歩くことにした。

平成26年9月14日(日)、三宮から地下鉄湾岸線に乗り、和田岬駅で下車して、三菱重工造船所の入り口まで歩いた。さらに三菱神戸病院横の道路を西に向かい、三菱電機の敷地に沿って道なりに海に向かって歩くと10分ほどで神戸検疫所に至る(図7)。広い敷地に建つ低層の瀟洒な近代的ビルだ。休日のため門は固く閉じている。神戸検疫所周圍の川の流れは激み、川底にはペットボトルや空き缶が散乱し、雑草が生い茂っている。美しい神戸検疫所と周囲の荒廃した景観の対照がすさまじい。湊川の戦いの古戦場の一つである遠矢浜を一目見ようと海に向かったが、高い防波堤のために海岸線に出ることはできない。

普段は行くこともない遠矢浜町を散策した後に、午後2時きっかりに神戸検疫所をスタートした。もと来た道を逆に歩いて三菱重工造船所の入り口前を出て、ここから和田宮通りを北に向かい和田神社まで歩いた。和田神社は土地の氏神さまとして信仰を集めた由緒ある神社で、その鳥居は大きく境内もかなり広い(図8)。15分ほど神社内を見物してここから最終目的地の県立神戸病院跡地に向かった。和田神社から新川に架かる橋を渡り、神戸市中央卸売市場の前に至る。七宮神社前で国道43号線に沿いに三宮

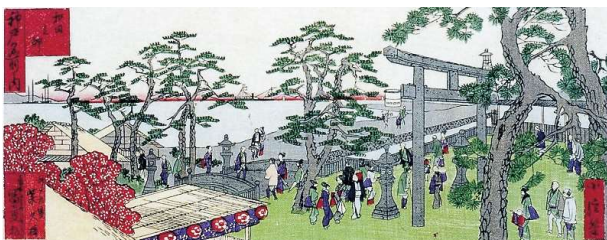


図6 神戸名所之内 和田之岬(出典:文献6)鳥居の左に砲台、右に灯台が見える。



図7 遠矢浜の神戸検疫所



図8 和田神社の大鳥居

方面に向かい、ハーバーランドの東川崎交差点で有馬街道に入る。JR線の高架をくぐり神戸駅前を出て、宇治川商店街を北上して下山手通八丁目の県立神戸病院の跡地に着く。時計を見ると午後3時半である。和田神社の見物に15分ほど費やしているから、遠矢浜の神戸検疫所から神戸病院跡地まで賞味1時間15分かかった。和田岬は意外と近い。

「病」によれば子規は午後3時に記者仲間に担架と神戸病院入院の手配を頼むが、担架が和田岬の検疫所に着くまでに2時間ほどかかったから、和田岬検疫所と神戸病院の間は片道1時間ほどである。担架という負荷があっても私より15分ほど早い、当時の人の歩みは私よりずっと早いだろう。担架に載せられた子規が和田岬検疫所を出発するのは午後5時すぎで、神戸病院まで1時間かかるとすれば、午後6時頃の到着となる。子規が神戸病院に着いたのは「病」には灯ともす頃とあるから日没前の夕闇の迫る頃だ。神戸の5月23日の日没を調べると午後7時1分だから手元に灯が欲しくなるのは6時前後だろう。大まかな計算であるが、「病」の記載に合うのではないだろうか。

ともかくこうして子規は神戸病院に入院し、二階の二等室に入る。子規の「病」には病室番号の記述はないが、子規宛ての内藤鳴雪の手紙によれば16号室である。子規の病室は余り広くはないが白壁が綺麗で天井は二間(3.6メートル)ほどもある。佐渡国丸では天井まで三尺(90センチ)



図 11 須磨保養院 (出典：文献 13)

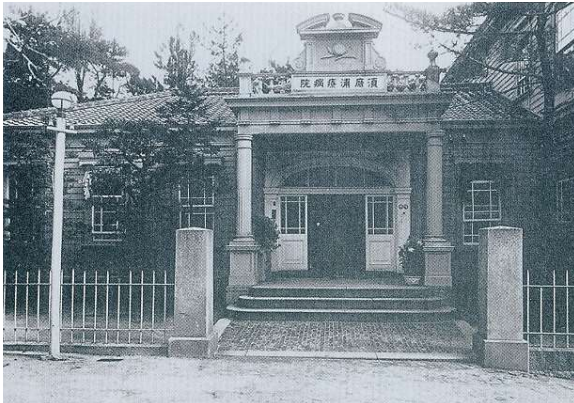


図 12 須磨療病院本館の玄関 (出典：文献 14)

5月23日、卯の花の咲くころに神戸病院に入院した子規はその2か月後の7月23日に退院して、高浜虚子に伴われて須磨保養院に移る(図11)。神戸病院から須磨保養院までの交通機関については「子規居士と余」には記載がないが、たぶん人力車で神戸病院から神戸駅に向かい、そこから山陽鉄道(現在のJR山陽本線)を利用したのではないだろうか。明治21年、山陽鉄道の兵庫駅と明石駅間が開通し、翌年、兵庫駅と神戸駅間も連結する。この山陽鉄道の須磨駅で下車したのだろう。山陽電車はまだない。子規は虚子に伴われて人力車で須磨保養院に向かったことだろう。須磨保養院は、和洋食の賄つきの料理屋兼旅館のようなものであるが、自炊も可能で、かなり自由度が高い施設であったようである。本館の右手に病人用の二階建て長屋が二棟ほど一列に並んでいた。この病棟は新館であったから、東側を東新、西側を西新と呼んだらしい。子規はその東新の二階で起居した¹³⁾(図11)。この須磨保養院は、後に料理旅館の須磨花壇となるが、現在の須磨浦公園のみどりの塔の付近にあった。

この須磨保養院の近くに須磨療病院がある(図12)。須磨保養院と須磨療病院は名前が類似しているせいか良く混同されるが全く関係が無い。この須磨療病院は、鶴崎平三郎医学士により明治22年8月に開設された日本で最初の結核サナトリウムである¹⁴⁾。もっとも結核サナトリウムとしては明治20年7月に開設された鎌倉海浜院が最初であ

るが、翌年にはホテルに転用されているので、須磨療病院をもって日本最初の本格的なサナトリウムとしてよい¹⁵⁾。須磨療病院は、現在では須磨浦病院と名前が変わったが、当時と同じ場所にある。子規は須磨保養院の背後の山中にある須磨浦療病院初代院長の鶴崎平三郎医学士の診察を受ける(図13)。

以上を頭に詰め込んで、平成25年9月7日(土)、夏の暑い日の午後、私は山陽電車に乗り、須磨浦公園駅で降りて子規ゆかりの場所を探した。駅前のロータリーから山陽電車の軌道を跨ぐ橋を渡り、さらに西に向かう緩い坂を上りきると、瀬戸内海と淡路島の展望がすばらしい所があり、ここに有名な蕪村の句碑「春の海終日のたりのたりかな(蕪村)」がある。さらに蕪村の句碑の山側に芭蕉の句碑「蝸牛角ふりわけよ須磨明石(芭蕉)」もある。

ここで道路はヘアピン状に東に転じるが、間もなく道路脇に子規と虚子の師弟の句碑「ことづてよ須磨の浦に^{びるね}晝寝すと(子規)」と「月を思ひ人を思ひて須磨にあり(虚子)」がある。

さらに道路を上ると須磨浦公園駅から山上に向かうロープウエーの軌道の直下を通る。頭上のロープウエーを見ながら、古い別荘地のような家屋の庭先の小道を通り抜けると、眼下に須磨浦病院が見えた(図15)。病院敷地内の旧須磨浦療病院の院長宅は建築史的には非常に貴重であるが、森の中で全く見えない。須磨浦病院に向かって道路を下がっていき、黒いベンツが窓を開けながら近づいてきて、窓越しに太い腕でつかまれた時は驚いた。良く見たら名誉教授のM先生だ。近くの先生のご自宅に立ち寄り、し



図 13 鶴崎平三郎 (出典：文献 14)



図 14 子規・虚子の師弟の句碑



図 15 須磨浦病院 (旧須磨浦療病院)

ばらく歓談後、再び須磨浦病院に戻り、病院正面の玄関に入った。玄関ホールには開設当時の須磨浦療病院の写真(図 12)が飾ってあった。現在では肺結核は扱ってなくて、介護型病棟をもつ一般病院である。

須磨浦病院前の道路を下り、海岸線を走る 2 号線に出て、これを西に向かって須磨浦公園の西端にある敦盛塚を参拝する。自分の子と同じぐらいの年若い敦盛の首を刎ねた熊谷次郎直実は、その後、深い無常感に襲われ仏門に帰依する。そして故郷の熊谷(埼玉県北部の町、暑いぞ熊谷で有名)に戻り熊谷寺を建立する。私はその熊谷寺の裏手で育った。「子規居士と余」には「ある時は須磨寺に遊んで敦盛蕎麦を食べた。居士の健啖は最早余の及ぶところではなかった。」とあるので、敦盛塚の隣で営業している蕎麦屋で子規を偲んで敦盛蕎麦を食べた(図 16)。一杯 500 円のネギだけの淡白な味のソバだった。敦盛の首は須磨寺の敦盛公墓所(首塚)に、胴体は須磨浦公園の敦盛塚に埋葬されている。須磨寺と敦盛塚の間の距離は相当あるから、病身の子規は歩けただろうか。子規が食べた敦盛蕎麦は、須磨寺の近くの別の蕎麦屋かもしれない。

ソバを食べた後に、海沿いに国道 2 号線を神戸方面に戻り、須磨浦公園の東端に近い所にある「みどりの塔」に向かう。みどりの塔の両翼の石柱の上にはそれぞれ球形の石が載っていたが、左側のものは地上に落ちている。阪神淡路大地震のときに石柱からころげ落ち、以後、地震の記憶としてあえて元に戻さず、そのままの状態にしたようである。このみどりの塔の周辺にあった須磨保養院やその後継の須磨花壇の跡を示す土台や側溝などを探したが、全くわからなかった。

須磨浦公園に別れを告げて、国道 2 号線沿いに須磨海岸駅方面に歩き、千守交叉点を左折して須磨寺に向かった。ここに子規の句碑があるからである。須磨寺の仁王門をくぐると「暁や白帆過ぎ行く蚊帳の外(子規)」の句碑があった(図 17)。

夕闇が迫る中を須磨海浜公園に向かった。この公園の西端にある野村記念病院の近くの和田岬灯台を見るためである。この灯台は日本で最初の鉄製灯台で、昭和 39 年に和

田岬から須磨海浜公園に移設された(図 18)。灯台の色は原則的に白と決められているが、役目を終えた和田岬灯台は、沖の船から誤認を避けるために赤色に塗り替えられたため、公園近隣の市民から赤灯台という名前で親しまれている。明治 28 年 5 月 22 日に下関から和田岬に着いた子規は、きっと佐渡国丸の船上から和田岬灯台の光を見たのではないだろうか。歩くことすらできなかった子規は、果たしてどのような思いで灯台の光を佐渡国丸の船上から眺めただろう。



図 16 敦盛塚と敦盛蕎麦



図 17 須磨寺の子規の句碑



図 18 須磨海浜公園の赤灯台

神戸病院の2か月、須磨保養院の1か月の療養を経て、子規は奇跡的に回復し、故郷松山に戻り、漱石が下宿する2階建ての家の階下を占有して連日句会を催す。そしてその数か月後、子規は松山から神戸を経て上京の途中、奈良に遊び、およそ日本人であれば誰でも知っている有名な俳句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺（子規）」を作る。しかし奈良で遊んだ子規は腰を痛み、歩行に困難を覚えていた。子規はリュウマチを疑っていたが、既に子規の結核は脊椎カリエスに進行していたのである。もう少し長く神戸病院か須磨保養院で療養を続けていれば、凄まじいその後の闘病生活を避けることはできなかっただろうか。神戸病院そして須磨保養院で再生した子規は、前にもまして創作意欲に満ち、静かに養生する気分ではなかったのだろう。

【補注】

- 1) 明治21年の夏、20歳の子規は鎌倉で遊ぶ。源頼朝の墓から鎌倉宮までの途中に、雨の中、2度ほど嘔血する。そして明治22年5月2日、大嘔血に見舞われ、医師より結核の診断を受ける。当時、結核という診断は死を宣告されたに等しい。死を覚悟した子規は、「啼いて血を吐く」というホトトギスに困み、俳号を「子規」とする。子規はその年の夏休みに郷里の松山に戻るが、そこでもまた嘔血する。故に佐渡国丸甲板で吐血したのは通算で4回目となる。
- 2) 神戸検疫所の公式ホームページによると明治11年に開設された和田岬消毒所は明治29年に和田岬検疫所に名称変更する。子規が和田岬に着いたのは明治28年当時は和田岬消毒所が正しい。しかし混乱するので、本書では「病」に従い和田岬検疫所で統一する。ただ検疫所と消毒所は隣接していた施設であるから、両者の区別は余りなかったのかもしれない。
- 2a) 子規の「病」には細かい日付の記載はないので、正岡子規著「陣中日記」（子規全集 第12巻随筆二pp.77～98 講談社刊行）で日付を補った。
- 3) 中浜明編「中浜東一郎日記」第1巻 富山房（平成4年刊）。この日記の明治28年5月23日の記述は「五月二十三日 晴 随員樋田、着神、和田岬に赴く。佐土国丸に行き船底汚水消毒の事を談す。佐土国丸（乗込人二九九）馬関にて虎列刺を發し、和田岬にて昨夜腸胃カタル二人を發せり、本日進行を許せりと云ふ、但し臨時検疫局長官の通知を誤解したるなり。」とある。船の名前が佐渡国丸ではなくて佐土国丸となっている。

- 4) 陸軍省編著 明治三十七八年戦役検疫誌、附図6, 22, 23, 出版者 陸軍省（明治40年）。本書は近代デジタルライブラリーに公開されている。
- 5) 明治24年兵庫和田岬和楽園全図 池長孟コレクション（神戸市立博物館蔵）。
- 6) 神戸名所之内 和田之岬（長谷川小信）明治5～7年（神戸市立博物館蔵）。
- 7) 和田神社で購入した神戸史談を後日読んだところ、5月23日の祭りが明治44年より同月22日に変更したと書いてある。安田泰子著 和田宮縁起文書 神戸史談 235号 page 5～12、昭和49年10月。
- 8) 江馬文書研究会編 江馬家来簡集 思文閣出版（1984年刊）
- 9) 正岡子規著 消息 ホトトギス 第4巻 第3号。明治28年県立神戸病院の職員録には泉虎雄医員の名前はあるが、村井医師の名前はない。
- 10) 竹村鍛著「松窓余韻」出版者：芳賀矢一（明治36年3月出版）。黄塔は4年間ほど神戸師範に教諭として勤務し、辞して東京府立中学の教員となる。黄塔は字（辞）書作りが夢だったので、府立中学も辞して辞書の編纂で有名な富山房に就職する。しかし富山房では教科書作りに忙殺されて字書編纂の志を遂げることができず、明治33年に女子師範学校（現お茶の水女子大）の教授となる。翌明治34年2月1日、黄塔は結核により3人の幼子を残して死ぬ（享年37歳）。子規と黄塔は幼馴染で、一緒に俳句や漢詩を作った仲である。子規は黄塔の学識を愛し、わからない言葉があると必ず黄塔に質問するほど信頼していた。子規はまさか自分より先に黄塔が死ぬとは思わなかったろう。その死を知った子規は、「我に先だつて彼の逝きたるは彼も我も世の人もつゆ思ひまうげざりしをや。」と黄塔の早すぎる死を悼んでいる（子規著「墨汁一滴」明治34年2月7日）。
- 11) 宮地伸一著 「子規と鷗外の出会い」子規全集第12巻月報7 page 3～5 講談社（昭和50年10月）
- 12) 正岡子規著「くだもの」「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店 1985（昭和60年）
- 13) 古賀蔵人著「神戸病院から須磨へ」子規全集第12巻月報7 page 8～9 講談社（昭和50年10月）
- 14) 鶴崎範太郎、鶴崎隆一著「須磨浦病院創立100年」平成元年
- 15) 島尾忠雄著「杏結核資料館と須磨浦療養病院 複十字 339号 page 14（2011年7月）。竹下隆夫著：旧須磨浦療養病院と旧国立神戸療養所について 同page 16。島尾・竹下著 湘南地方サナトリウム旧跡訪問 複十字 No.337, page 26～28, 2011年7月。いずれもネット上に公開されている。

（平成27年12月11日記）

■未発表原稿